The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	対話についての対話 ： ネクストステージのために
Author(s)	八木, 絵香; 本間, 直樹
Citation	Communication-Design 特別号. 2016, 1, p. 246-265
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/55650
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

DIALOG 03
Ekou Yagi × Naoki Homma

対話についての対話

ネクストステージのために

八木 絵香 × 本間 直樹

PROFILE

八木 絵香 ｜ Ekou Yagi
科学技術部門　准教授

早稲田大学大学院人間科学研究科修了後、民間シンクタンクにおいて災害心理学研究に従事。多数の事故・災害現場調査を行うと同時に、ヒューマンファクターの観点からの事故分析・対策立案に携わる。現在は、社会的にコンフリクトのある科学技術の問題について、意見や利害の異なる人同士が対話・協働する場の企画、運営、評価を主な研究テーマとしている。

本間 直樹 ｜ Naoki Homma
臨床部門　准教授

「臨床哲学」の創設メンバーとして、コミュニケーション論を軸に、哲学的対話の方法論と実践、「こどもの哲学」、身体・セクシュアリティ論などに取り組む。CSCD では、ワークショップ記録を含めた映像コミュニケーションの実践的研究にも挑戦している。

対立の構図ではない対話をめざして

本間　これから相互インタビューとして、まず、私から八木さんにお話を伺い、途中で交代して八木さんから質問をいただいて私が答え、最後は自由に話しあう、という具合に進めていきたいと思います。それでは、私から質問。他のみなさんに同様の質問をしたのですが、八木さんは CSCD に来られる以前と以後でどのように変わられましたか？

八木　その状況や対象に応じて少しずつ変わってきてはいるけれども、自分自身の研究の関心やスタイルの本質は変わっていないと思います。違いがあるとすれば、私自身にとって「CSCD 以前／以後」イコール「大学教員以前／以後」なので、明確に違う点があるとすれば「実践を論文という形で残す」ことを強く意識するようになったことですね。

本間　「大学教員以前」にはどういうことをされていたのですか？

八木　民間企業で働きながら、途中で博士課程に進学し、博士号を取得したタイミングで CSCD が設立されることになり、合流しました。すでに過去の『オレンジブック』（機関誌『Communication-Design』の通称）にも書きましたが［八木 2010］、もっとも深く関わっているテーマは原子力です。原子力の問題について、二項対立的ではない対話の仕組みや、もしくは立場性を離れた上で個々人が感じていることや考えていることを率直に言える場を創りたかった。それがもともとやりたかったことです。ところが民間企業の所属ではそれをやろうにもハードルが高くて。そういう場を創り、社会に開いていくにはやはり大学 ── というのも、もちろん「中立」はありえないのだけど、社会の中で相対的には中立と見なされがちというか、いろいろな利害関係が異なるアクターに対して、手をのばしやすいのは大学だろうと思い、働きながら、博士課程に進学しました。

本間　両方を同時にされたのですか、それは大変でしたね。

八木　そうですね。でも、大変以上に「場」を創りたいという想いの方が強かったですね。ただ、博士課程に進学した当時は、「実践」がやりたいという気持ちばかりが先行していて、あまり「研究」をしたいという意識は高くなかったんですよ。実は。博士号を取りたいという気持ちではなかったというか。実際には、大学に身をおいて、研究の一環であるということを意識しながら場を創ること、実践に取り組むことは、自分が博士課程に進学する前に考えていた以上に意味があった。なんというか、最初は無我夢中というか、道のないところに道を創るような感覚だったので、自分でも気づけなかったのです。でも、ある程度場が成立してくると、場を創ることにばかり関心をもちすぎると、近視眼的になるような気がするというか、これでいいのか？と自問自答するようになってしまった。特に、自分の実践が周りからポジティヴな評価を得れば得るほど「本当にこれで良いのか？」と自分で疑問を感じたり、私が始めたばかりのひとつの事例が取り上げられすぎることに不安を感じるようになりました。そういう時に、「対話」ということに関するさまざまな分野の文献を読むことや、また自分の考えを概念化して、発表・議論したりすることの比重が大きくなっていったというか。それでも博士課程にいるとき

には、まだまだうまく自分でバランスがとれていなかったのですが、CSCD に来て、さまざまな実践と学問を横断する多様な研究スタイルに出会って、自分の中で実践を振り返るために書くというペースがうまく回り始めた感じはします。CSCD に来て、一番変わったことはそれですね。

本間　話がすこし戻りますが、ポジティヴな評価を得られる、とはどういうことですか？

八木　原子力の分野では、福島第一原子力発電所の事故以前から、その方向性の違いはあるにせよ、意見の異なる者同士のコミュニケーションが必要である、逆の言い方をするとコミュニケーションが機能不全を起こしているという危機感はありました。コミュニケーションの場がないという言い方もできるし、場はあっても意見や立場の異なる人同士が冷静に話し合うことができないことの課題が大きいと認識されていたというか。そういう環境の中で、私が原子力施設の立地地域の人々と始めた試みは、意見や立場の違いがあるにせよ、そこで一定、冷静にというか、かみ合った形で議論が成立しているということで注目されたり、ポジティヴに評価されたりしたのだろうと思います。いろいろな方から「話を聞きたい」と言われたり、ポジティヴな評価の言葉をいただいたりしたのだけれども、そうすると逆に、場がないところに創ろうともがいていた時よりも、「本当にこれで良いのか」と自問自答するようになったというか、逆に自信がもてなくなったということですかね。

本間　それはなぜなんですか？とても興味深いのですけれども。

八木　この件に関わらず、周りの多くの人が「良い」と言うと、「本当に？」と反射的に思ってしまうくせのようなものが自分の中にあるということなのかもしれません。特にポジティヴに評価してくださった方が、原子力技術を推進しようとしている側に多かったこともあって、無自覚に、「推進に与する形になってはいないか？」と自らの実践を批判的にみるようになったこともあると思います。

本間　なるほど。「評価」という視線がまず社会のどこにあるかということですね。もうひとつ、「二項対立ではない対話」とおっしゃったのですけれども、ここでの立場というのは例えば、原子力に関しては「推進」か「反対」かといったことでしょうか？

八木　一番分かりやすい言葉として表現すれば「推進」「反対」ですし、別の言葉で表現すれば「電力生産地」「電力消費地」でしょうか。「推進」「反対」の中にもイデオロギーとしての対立もあれば、「商工関係者」「農業漁業関係者」のように「生業」という意味での立ち位置の違いなどもあります。その他にも、いろいろな軸があるのです。

本間　対立の構図ではない対話というのは何をするのでしょうか？

八木　言い換えると「建前ではない対話」ということでしょうか。原子力発電所はこの「まち」にいらないと考えることは問題ないのだけれども、いらないと言葉にしてしまった人が原子力発電所がもつ全部の要素を否定する場合は少なくないんです。一方で、この「まち」に原子力発電所は必要だという人は、原子力発電所にまつわる全部の要素を肯定しなければ、推進できないと思っているというか。原子力発電所をどうするかという議論ではなく、原子力発電所があることで、このまちにはどのようなことが起こっているのか、それをそこに住む人はどういうふうに感じているのか、そういう話を普通に会話できる

ような場が必要なんじゃないかと思っていたんです。原子力発電所はそれほど危険ではないとは思っているのだけれども、「嫌なんだ」という言い方があっても良いと思うし、逆に「すごく危ない」と思っているけれども「経済や生活のためにはやむを得ないよね」という意見があっても良い。というよりは、それが当たり前だと思うのです。最終的に「賛成」「反対」という強い言葉として表現されるものの背後には、もっといろいろな感情や状況認識があるはずなのに、言説として語られるときには、推進している人は原子力発電に関わる全てを肯定的に主張し、反対している人はその全てを否定的に主張する。その構造をほどきたかったんでしょうね。

本間　「対話」と言われるときに、「イシュー（話題）に関する論拠」や、「立場の取り方」というポジショニング、もうひとつ、対話する当人というか、例えば「住民」や「行政」といった人たちの立場は、とりあえず二つに分かれることを前提にしているのでしょうか。

八木　研究として捉えるのであれば、そういう形で整理したいという欲求があることは否定しません。一方で、分けたいと思ったとしても、そんなにクリアに分類はできないというか、やはり不可分な部分はたくさんある。当たり前ですが、人にはいろんな立ち位置があるというか、職業人であったり、父であったり母であったり、自分の両親にとっては子供であったり、その中でさまざまな人間関係の輪が重層的にできあがってそれから影響をうける中で、ある人の意見がでてくる。原子力発電所の立地地域に行けば、行政の人であり、当該地域の住民である確率は高いですからね。それを「行政」「住民」と分類することはできないですよね。

本間　整理できないとは不可分ということですか。

八木　不可分です。私はディベートという形式にはあまり興味はなくて、対話自身に興味がある。というのは、ディベートは、何かのポジショニングを設定した上で発言するということでいったん「わたし」を脇に置くことができますよね。そういう議論ではなく「不可分」であることを意識して始めるというか、その人の置かれている立場や状況や人間関係と、そこで語られている内容は不可分であることを隠さずに議論をするというか。個々人の思想や背景や歴史から独立して原子力に関わる「発言」はないというか。原子力の話＝安全や科学技術の話となりがちで、そういう文脈では、確かに誰がどのような背景で何を言ったかということは考慮されてはならないのだけれども、同時に原子力の話は、やはり背景が必要な議論もある。私は、結論として、原子力技術が肯定されるか否定されるかではなく、個々人がそういう判断に至った理由、つまり「原子力技術」を切り出したところではなく、日常生活からの延長上にでてくるステートメントに関心があるんだろうと思います。

本間　なるほど。ステートメントにすることがひとつのゴールなのですね。

八木　そうですね。最終的には「なんとなく嫌」や「なんとなく好き」でも良いと思うのですけれども、それだと対話がそれ以上に進まないので、その「なんとなく嫌」だと思っているものについて本人が語っていく中で、ただぼんやりと嫌だと表現されていたものが、具体的な表現もしくは何かの経験と結びつく形で、本人自身がいくつかの嫌な要素や理由を自覚したり、周りも「この人はこういう背景で嫌なんだな」というふうに共有され

ることが、私が目指している場なんだろうとは思います。なかなか説明してわかっていただけないのですが、どちらの意見になるかにはあまり関心がないのだろうと思います。

本間　それは今も変わらず続けられている研究、関心なのでしょうか。

八木　そうですね。加えて、この 5 年ほどは、進めているプロジェクト（公共圏における科学技術・教育研究拠点：STiPS）[*a] の影響もあるのですが、個々の気づきや理解だけでなく、それを政策に繋げる仕方というか、「ミクロからマクロへ」という方向に関心が動いてきているところもあります。CSCD 以前は、少人数の、対話そのものに強い関心があったのですが、今はそれをもう少しメタレベルに上げて、なんらかの形で政策に反映させるということを意識するようになっています。

本間　そこは共同研究としてですか。それとも自分の研究の中にそれを組み込んだ形でしょうか。

八木　CSCD 内のプロジェクト研究としてですね。話が少しそれますが、私が所属している科学技術部門は、CSCD の中ではテーマの設定というか対象となる分野や課題が明確でわかりやすかったこともあり、自分たちの部門だけで外部資金をとってきた。それはもちろん意味のあることだったけれども、部門としてひとつで完結してしまったところがあって、私はそれがもったいなかったとも思っています。もちろん、そのおかげで明確な成果が CSCD の 10 年で出せたということもあり、どっちが良かったのかと問われれば、悩むところではありますが。

本間　それはどういうことですか？

八木　例えば、今、「STiPS」で教育と研究のプロジェクトを担当しているでしょう。それは CSCD における明確なひとつの成果であり、その部分だけ見るとそれはそれで良かったことなのでしょうけれども、CSCD の良さはそういう部門、言い換えるなら専門を超えることだったはずなのに、外部資金によるプロジェクトが採択されたがゆえに、結局部門で完結してしまったのは、悪かったという気もしているんです。CSCD である意味から少しそれたような、もったいない気もするというか。

本間　交流や発展というよりも、どちらかというと成果を目指したチームワークに注力したということでしょうか。

八木　そうですね。だから私自身としては、元々もっていた問題意識や志向していたものの質的な変化というか、マイナーチェンジはたくさんあるものの、CSCD に来たからと言って何かがドラスティックに大きく変わったということはないような気がします。

本間　それが最初におっしゃった「そんなに変わってない」ということなのですね。

八木　それは一貫していて良いことなのかもしれないけれども、コミュニケーションデザイン・センターという箱があったにも関わらず変わらなかったということは、あえて批判的に言えば、その枠の中で、さらに専門が強化されたというか、蛸壺化していたのかなと言うこともできると思います。

自由になれた

本間　そうはいいながらも、このセンターに入ったからこそ始められたこととか、得られた視点とかもあるのではないでしょうか。

八木　自分のことですから、年齢も重ねていますし、きちんと前後比較ができないのですけれども、自由になれた感じはします。多分 CSCD にきたばかりの 10 年ちょっと前は、もっといろんな意味で固かったというか。でも今は「何でもあり」とは言わないけれども、少なくともどんなものでもありうるという前提でものごとを考えたり感じられたりするようになった。ファシリテーターを担うという意味では、特に楽になった感じがします。

本間　それは、人には見えない八木さんの中での「構え」の変化ですね。

八木　そうですね。CSCD はいろいろなものが「あり」じゃないですか。何か自分と違う考えや事象やスタンスにであったときに「えっ？」と思うのではなく「へぇ、どうしてだろう」とか「ああ、なるほど」と思えるようになったという感じですかね。

本間　いろいろな物事が、いろいろな前提や枠組みの中で成り立っているということに気付いて、それはそれとして捉え直して生きることができるようになった、ということですね。我々の分野だとそういうのを「アサンプション」と言います。多分私たちが「へー」とか「それはあり得ない」と思う時は、自分の枠組みを大きくはみ出るものに対する反応で、それはどっちが正しいか間違っているかというよりも、まず違う枠組みにいることを知るということですね。

八木　自分として興味深いのは、それを研究活動を通じての討論や論文の執筆の中で獲得したのではなくて、CSCD の中での日々の時間というか、経験を通じて、なんとなくそういうふうに自分が変わったのであろうと思えることです。自分は、博士課程の教育を「工学」の分野で受けてきましたが、CSCD はどちらかというと「人文学」の分野で教育を受けてきた人が多いですよね。哲学や歴史学や人類学など。そういう方々と共有した時間の中で得たものは大きいと思います。例えば、CSCD では、誰かが「結婚したんだ」というと最初にくる質問が「へー、で、籍は入れたの？」だったりするじゃないですか。籍を入れたというと、男性に対しても「で、名字はどうするの？」と聞いたり。驚くというほどではなかったけど、そういう会話に違和感を感じなかったと言えばやはり嘘になるというか、本間さんがおっしゃるところの、いろいろな前提や枠組みの中ですべてが成り立っているということに気付いたきっかけは、こういう日々の経験の中にこそあるんですよね。それが個人として得た一番大きなものだろうと思います。

本間　その事実は非常に興味深いというか、人からは気づかれないところで大きく変わったことがあるというのは結構面白いですよね。

八木　そうですね。私はこの 10 年の間に職場が民間企業から大学に移ったことに加えて、2 回出産しているんですよね。出産育児は、文字通り生活を 180 度変えるので、そういうことも全部混ざった上で、自分の変化なんだろうとは思いますが。

本間　個人的な経験として、出産や育児などはとても大きなことですものね。

八木　出産を通じて自らがはじめての経験をたくさんしますし、育児そのものを通じても自分の生活がガラッと変わりますし、加えて、子供を通じて出会う人やそのネットワークもガラッと変わる中で、知らず知らずのうちに、自分が今までもっていなかった枠組みに対する許容度が変わったと言いますか、「これもありかな」と思えるようになったところがありますね。そして、出産前の私には、出産育児は、研究活動を続ける上でのひとつのハードルという風に捉えていたのだけど、そういう経験や自らの変化も、場を創ったり、ファシリテーションをするときには非常に大事なのだということに、後づけで気づくことができました。もし、そういうふうに変わっていなかったら今まで続けられなかったかもしれないな、と思ったりすることもあります。

本間　「そういうふうに変わった」という部分をもう少し伺いたいのですが。

八木　外からくるいろいろなものに、ガチッとぶつかったり、避けたりするのではなく、一回弾力をもって受け止めることができるようになったという感じでしょうか。受け止めたからといって、消化できるとかそういう話ではないけれども、固く弾くように反応したり、避けたりすることは減ってきているような気がします。

本間　それはちょうど今、私が高校で経験していることかな。対話をするときの常識と思っているものが全く通用しないときに、以前だったら拒否感をもって「もうこんなところでやってられるか」とか「相手が悪い」と思って済ませたことを、もうちょっと静観できるようになったということがあります。

八木　そうですね。一回、仮置きできる場所が自分の中にできたという感じかな。昔は受け止めたらすぐ何かの形で処理しなければ気が済まなかったものが、とりあえず分からないものを、分からないまま受け止めて置いておこうという心持ちになったということかもしれません。

本間　それは私にとっては大事なポイントです。「アサンプションをサスペンドする」という表現があって、これは「対話」ということをおそらく最初に言い出したブラジル出身のデイヴィッド・ボームという物理学者が言っていることなんですが、「聴いているその場で自分が反応してしまったことを、否定も肯定もせずに宙づりのままにしておく」ということなんですね。「サスペンドする」ことはなかなかできないことなのですけれども。

方法論としての対話ではなく

本間　ではこの辺りで私の話にスイッチしましょうか。今のお話は私の場合と似ているようで似ていないような話で、比較対象として面白かったですね。私もキーワードは対話になるのですけれども、私の場合は「臨床哲学」というところから出発しました。臨床哲学というものは本当に始まったばかりで、まだどうすれば良いかも分からないようなときに……。

八木　いつ頃のことですか。

本間　まだ2000年前後の話で、臨床哲学の扉は開いてみたけれども、象徴的な言い方としては、本に書かれた理論だけに頼らない、というくらいのざっくりした共通意識しかなくて、現場に向かうとしても、その現場でできることとは何かを私たちは考えていました。そこで一歩踏み出したのが、「対話をする」ということだったのです。それは八木さんとは対照的に、「誰と」「どんな場所で」ということがそんなに最初から明確だったわけではなかったのです。多分「臨床哲学」にせよ「コミュニケーションデザイン・センター」にせよ、つくられた鷲田清一さんの中でも、特に「この問題について対話したい」ということがあったわけではなかったのだと思うのです。そういう環境で私は哲学カフェなどいろいろ活動していく中で、やはり対話してみることの面白さに引き込まれたんですね。このセンターができるというときにも鷲田さんたちと話していたのは、やはりちょっとメタというか、いろいろなところで対話などを実践している人たちが交流できる場所、「フィジクス」のあとに「メタフィジクス」があるように、「メタ対話」のような場所が「大学」にあったら良いのではないかということで、形になったのがこのセンターでした。結果として八木さんがそうであり、他の人がそうであり、私たちも細々とですが、哲学カフェを中心とする――「医療関係者」との対話が多かったですが――いろいろな対話、コミュニケーションの経験のある人たちが一堂に会した形でこのセンターがスタートして、最初は本当に新鮮で面白かったのです。その当時私は、哲学の対話ということに全くこだわっていなかったのです。むしろ対話というものがどういうものか見極めたいという気があって、「対話一般論」のようなところに関心をもっていたと思うのです。

　その後の流れを大まかにいうと、実際に私が継続的に関わっていくような、小学校や高校など、さらに今では地域のコミュニティセンターや病院などで定点で関わっていくと、「なんかちょっと違うな」、そしてだんだん「対話一般ではダメだな」と思い始めた。もう少しビジョンというか、「そこで何が問題になっているのだろう」という、方法論としての「対話」ではなくて、「そこで自分が何をすべきか」ということから「対話」を考え直したというところがここ10年くらいのシフトです。

八木　それは具体的な現場に入り込んでいったからこそ、一般論の限界を感じるようになったということですか。

本間　そこはいろいろな要因があります。まず、このセンターがつくられた後、2010年ごろからでしょうか、世の趨勢として急に皆が「対話」と言い出して、本当に「対話」というものが形式や方法になってしまった、あるいは方法という以前の雰囲気のようなものになってしまった。

八木　対話のファッション化のような状況ですよね。

本間　その中で自分がやっていることがすごく薄められる気がしていて、それを取り戻すということもあったと思うのです。私は哲学カフェについては本当に何度も考えが変わってきたのですが、最初はやはり、対話ができる場がつくられることに非常に関心があって、さらに場そのものに関心があった。それは今でも変わらないのだけれども、それが「話しやすい」や「なんでも言える」というだけではダメで、やはり対話というものに参加

者や自分がどうコミットしていくか、そのプロセスがすごく大事だというふうに思ったのです。

八木　対話にコミットする、というのはどう意味ですか？

本間　哲学の場合は探究するということに重きを置いているので、その探究に入り込むということです。知りたいと思うことや、これは是非とも考えたいと思うこと、言いたいと思うこと、それが何かを見極めていくということ。

八木　自分の中で、ですよね。さっき私は「切り離せない」という言い方をしていましたが、借りてきた言葉などではなくて――その借りてきた言葉が最初の入口になっていてもいいのですけれども――やはり自分の中でちゃんと落ち着きどころを見つけて、そしてそれが言語化されるような、そういうプロセスですよね。

本間　八木さんふうに言えば多分そうなると思います。でも私はやはり、「言葉と人とを結び直す」みたいな感覚が非常にあって、だから場を強調しすぎないのはそこだと思うのですけれども、リラックスできて、なんでも言い合える場になったらいいということは決してゴールではない。そういう次元の話ではなくて、もう少し対話が深まっていくと、別に大勢で話していようが、一人で話していようが、その人の中にみんなで入り込んでいくような感覚があるのです。みんなで深く聴いているというか、その感覚がとても大事だと思っていて、だから人の中に深く降りていくような「話し方」「聴き方」が大事かなと思うようになりました。

八木　人の中に、であって、テーマにではないのですね。

本間　そのときは「テーマ」と「人」が結びついていくのです。ただ、その「テーマ」というのは多分変わっていくのだと思います。最近の例だと、癌患者さんと話をするときには癌患者さんの集まりなので癌を患うという経験が、背景のテーマとしてあるのですけれども、そのいろいろなアスペクトを語っていくのです。そこで共通して皆が聞きたい、知りたい、話したいと思う、向かう先があるのですよね。それは、希望であったり充実した生き方であったりするのですが、そういうものは、今の私の言い方もそうですが、単語にしてしまうと単なる一般観念というか、平たい言葉になる。それが本当に語られるのはその人を通ってきた言葉でしかないのです。「治療も今はやめて、自宅で、しかも他の人は勧めないんだけども、住む場所も変えて、大した物ももってこずに新しい場所で暮らし始めたんですよね」というお話を聴きながら、そこに人と人、人とテーマを結びつける何か、意味や観念が緩やかに見えてくるのです。

対話の中の引力

八木　CSCD に来る前に私が思っていた「哲学カフェ」や「哲学対話」は、「おせっかいとは何か」とか、もう少し一般的というか、普遍的なテーマについて語るタイプのものでした。それと私自身が関心をもっている強い体験について語る対話、具体的には、「癌サ

バイバー」や「癌の治療中の人」、私自身の経験でいくと「突然凄惨な災害や事故に遭った方や、大切な人を失った人」など、の間に対話としての違いはありますか？ それとも本間さんの中では、同じくくりの中に入りますか？

本間　理想を言えば同じくくりの中で話したいですよね。

八木　でも何か違うというか難しいと思うんです。同じ場の中で語りたいと思っている人がいても、強烈な原体験みたいなものがあると、きっと語りの質が違うというか、重さの違いのようなものがありませんか。

本間　たしかに重力みたいなものはあると思います。全員が共通に引かれている引力がある。

八木　引力があるタイプのものは、当たり前だけどご本人がとても混乱していたり、そもそも本人自身にも、言葉にすることを望んでいるか、望んでいないかもよく分からない状況だったりして、不用意に手を出してよいものではない。ただ一方で、時間や心身状態やいろいろな状況が変化してくる中で、どこかで語りたいと思うタイミングがあるんだなとは感じています。自分に対して意見がほしいとか、アドバイスがほしいとかではなくて、ただ聴いてほしいというか、聴いてくれる人がいる場で語りたいというか。

本間　3 つに分けた方が分かりやすいと思います。ひとつは、あまりバックグラウンドが問われない「自由討論」のような場、多分「哲学カフェ」と聞くと人が一番思い浮かべるようなそれと、今言われたように結構重力が大きくて、語りが重みをもたざるを得ないような場、そしてさらに、その中間の場もあると思うのです。この中間のところに私は焦点を置いているのかもしれないですね。それは何かというと、例えば、「被災という共通経験をもとにいろいろなことを話していきましょう」と、被災を経験してない人も混じえて話しあうのです。先ほどの「癌サバイバーの会」もそうなのですが、人間は遠い近いはあるにせよ、いずれ予期せぬしかたで死ぬのだ、というくらいの一般性をもって共通に引かれていることがらについて語るというのは、「自由討論型」とはやはりちょっと違うのではないか。重力がとても強くて、語るも語らないも身動きが取りにくくなっている、という状態からちょっとずらして、動き出したその先にあるところのものを少しずついろいろな人たちと分かち合う。その場に立ち続けるのは結構難しいのではないかと思うのです。

八木　でもそれがとても大事なのですよね。結局、当事者のものを当事者だけで閉じて語っていたら、囲っていたら、当事者にしか分からないというか。もちろんそれには意味があるのだけど、閉じた場での対話で良いのか？と悩むことになります。

本間　私が中間のものを重視するときに両端のものにどう関わるかというと、「ピアダイアローグ」のようなところから「ちょっと違う話し方してみませんか？」というような働きかけをします。いつもいつも病気のことばかり話すのではなくて、「もっといろいろなことを話してみましょう」とか、いろいろな人を対話に混ぜてみるとか、そういう別の方向づけをしたりもするし、逆の場合もあります。「みなさん自由に話をしたり、自由な立場から論じられると思っているけれども、本当にそんなことできてますかね」というように、もう少し弱くてもいいので、自分がどんなところに今引っ張られていると思うか、例えば「男である」や「女である」ということを「どっちでもとれるように話をし

ていますけど、実はそんなことはないでしょう」というように。もう少し私たちを引っ張っているものはいろいろな方向から伸びている。でも、バイアスを知る、というのではないのです。バイアス、偏りのない状態を想定するのではなくて、自分の中で引っ掛かっているものがあるということを、もう少しお互い意識していく。「もうちょっと違う話し方ができるのではないか」というようなことを、私も「自由討論型」に関わるときには結構意識しています。

例えばこの間、哲学対話に関するシンポジウムのようなものがありました。そのときはたまたま「障害をもつ人がそこに来たときはどうしますか」という問いから始まったのですけれども、そんなときに「哲学カフェは誰でもウェルカム」というようなことを言ったって、確かに私たちは、すでにある可能性を選ぶところから出発している。障害をもつ人への情報保障のあるなしもそうなのですが、そういう技術的なことも含めて、いろいろな選択をしているわけだから、まず事実として誰でもウェルカムではないし、発言もそんなにバリアフリーではないのではないかなと思うのです。もうちょっとバリアを意識するところから丁寧にやりたいですよね。いきなり自由に話すことを目指すのではなくて、「確かに私たちはバリアの中で喋っているのだ」と、そこをもっと意識的にやりたいのです。そこを意識していくと、必ず、属性とは言わないにしろ、自分を引っ張っているものを意識せざるを得なくなると思うのです。

八木　自分を引っ張っているものですか。面白いですね、表現として。CDCD に来る前から「対話が必要だ」と思ってきましたが、振り返れば、非常に粒度の粗い話をしていたことが分かります。このセンターが 10 年あって良かったと個人的に思うのは、「実践の積み重ね」プラス、対話に関心をもち実践を積み重ねる多様な人々と、ちょこちょこ喋る機会があって、そう、学会や研究会のように改まって議論する場ではなく、お昼を食べながらや、コーヒーブレイクやそういう日常の中で、対話の経験や悩みについて言葉にして、それを通じて自分なりに位置づけを整理していけたことでしょうか。

豊かな表現を求めて

八木　そういえば自分の中の変化として、もうひとつありました。『オレンジブック』の 3 巻目の原稿を書いたときに、編集を担当していた本間さんに「もうちょっと“私”が出るといいですね」と言われたのです。それがとても新鮮というか、そんなことできないと思ったんですね。そのとても苦手だった「“私”を出して書く」ということが苦手ではなくなった、これは大きな変化です。現象学的なものに非常に惹かれるようになったことも影響しています。

本間　私の言葉が新鮮なつっこみになりました？

八木　新鮮でした。私は博士課程を工学研究科で学び、学部・修士も専門は実験をベースとした人間工学だったので、アカデミックなペーパーを書くということは「自分をいかに消

すか」ということだったんです。論文はそのように書くものだとしか思っていなかったから、本間さんに言われた時には「“私”を出す」ということの意味が分からなかったんですよ。ちょうど同じ頃に、小林傳司さんと共同でグラントの申請書を作成していたんですが、小林さんが冒頭で「本研究では○○と△△ついて、論じたい」と書いているのをみて、「～（し）たい」という表現に強い違和感をもちました。申請書の「型」という意味でもそうですが、こんなに自分を出してしまって良いのかと気になって、正直な気持ちを言えば、恥ずかしくてしようがなかった感じでした。「“私”を出す」という視点がないと書けないものがある、と理解できるまでには少し時間がかかった気がします。それを原体験として、自分の書くもの、特に文体が変わったとは思いますね。

本間　その場合の「私」というのは、もちろん今の前提は論文の話だと思うのですけれど、著者としての個人というよりは、社会的な私だと思うのです。さっき言われた「ステートメント」というのに近いと思うのですけれど。

八木　論理構成の中で、著者はこれを強く意識しているということを明示するという感じですかね。

本間　それが複数あるということが前提なので、だからこそ明確にするために「私」という主語を出すことだと思うのです。それは多分、人文系の書き方のスタイルのベースには対話があるということだと思うのです。

八木　今は、最初の切り取り方が、「私」が非常に大事だと思うようになって、そこが見えないもののほうに違和感を感じたりするのですが。著者がどういう背景のもとに、この問題に関わろうとしていて、というところが見えない文章は良いと思わなくなっているというか。それは、CSCD に来なければなかった変化ですね。

本間　八木さんがそういうふうに変わられたのだとしたら、それは成果ですよね。なかなか大変なことだと思います。

八木　学問のスタイルの変化でもあるし、書き方のスタイルの変化でもありますね。ところで、逆にと言うか、CSCD で「できなかったこと」は何かありますか。

本間　私がさっき言いたかった中間の意味での対話を探っていくということが、なかなか人と共有できない。「こういうのが大事だね」と分かり合える相手は見つかっても、そこで止まってしまう感じがして、難しいなと思っているところです。大学でやっている限りは、そこを抜け出してもう少しこっちの方向に進むべきではないか、ということを一般的な指針として示したほうがいいと思うのですけれども、なかなかそれができていないと思います。

八木　その「中間が大事だ」ということは、私がやっているようなテーマではどちらかというと当事者からでてくる言葉ですね。なぜなら「事故や災害で大切な人が亡くなった」「自らが生死の境をさまよった」ということ事実を、個人の経験として語るだけではダメだ、それでは同じような事故や災害を防ぐことはできないという強い気持ちが当事者にはあるように思います。もちろん、その原体験を知らない人に対しては、「あなたに何が分かる！」「あなたには分からない」というような言葉もでてくることがありますし、場面にもよるのですが、私にしか分からないという想いと、同時に、これを私だけの記憶

ではなく社会の記憶にしたいという強い想いというか、そのジレンマ。こういう意味での「中間が大事」ということでしょうか？

本間　具体例しか思いつかないのですが、例えば、私は学校で哲学の対話をする活動をずっとやってきていて、最近徐々に活動が広がりつつあるんですが、私にとっては、どの学校でやるのかが結構大事な選択なのです。もちろんまだまだ初期段階なので、やらせてもらえれば万々歳というところもある反面、私がやりたい場所は進学校ではないのです。やりやすさで言えば、「対話教育を学校でやりましょう」というとやはり進学校ではウケがいい。これは先程の３タイプでいうと「自由討論」のイメージに近い。実際にそうなっているかは別として、イメージはそうなのです。でも私が最も関わりたいのは、小中高については公立の学校です。理由は簡単で、生徒たちは地域で割り振られて来ているので、いろいろな人たちがいて、学校に行くだけでも地域の課題や状況、先生方のご苦労など、いろいろなものがワーっと見えてくる感じがするのです。私にはそういう背景のリアリティがとても大事で、授業や対話の常に底辺を流れているものがちょっとした発言などに見え隠れしている。下手をすればそういうものをノイズに思う人もいるかもしれないですが、自分の生活背景みたいなものがふとした発言の中に折り重なって出てくる、そういう経験を重視したいのです。架空の立場でばんばん論じるのではなく。

　これは実際にあった小学校での対話ですが、「平等」ということが話題になっている時に、「あ、自分は平等って感じられてない」、「だってご飯が好きなだけ食べられないから」と、自分の経験をパッと繋げて言えるような、そういうことが起こること自体がとても大事と思っています。学校での対話って実際にはなかなか難しくて、学校という人工的な場所で何か一緒に考えるということを目標にしたとき、自分の苦労や境遇を話す、といった自分の言い分を伝えることとは違う語り方で自分のことが話せて、それを聞いているほうも単に一般的な問題だけを考えているのではなく、それは誰かの問題であるということを忘れずに聞いていくというようなことは、意外となされにくいと思うのです。だから個人の語りでありつつ、一般の語りでもあるという意味で、第三の、というか「中間」のつもりです。

八木　なぜ進学校ではダメなんですか？

本間　別にダメではなく、進学校でも本当はそういうことは見えてくるはずです。ただ、見えにくいということもある。

八木　見えにくいのと、進学校になるとそれをうまくマスクできるくらいの器用さがある子が多いということなのかもしれませんね。

本間　そうですね。かなり言葉を端折って乱暴に話を展開したのですけれども、進学校でももちろん同じような課題はあると思う。でも、この辺はもしかしたら CSCD の影響なのかもしれないですが、いろいろな人がいるところでやるのに意味があると思っています。

八木　「平等」でもなんでも良いのですけれども、一見、抽象的に見える概念が、それぞれの生活や経験、目の前にあるものとパンと結びつく。多分、公立校のようないわゆる進学校でない場のほうが、結びつき方が非常にストレートで、自分の原体験と結びつく瞬間が見えやすいのかもしれませんね。その意味では、少し啓蒙的でもある気がするのです

けれど。

本間　ポジティヴな意味での啓蒙ですよね。

八木　はい。抽象的な概念というものが自分と全く違う世界のもの、学者の言葉としてあるわけではなくて、それがあなたのどこかにも繋がっているよということを知らせる場にもなっている気がするという意味です。私自身も全く同じ経験ではないですが、「そういう難しい話は分からない」「そんなのは偉い人たちで考えて」と言われることに抵抗を感じることがあって、ただそういう中でも「あっ、何か今繋がったな」と感じる瞬間が印象に残るというのはありますね。

本間　あと対話といっても、欧米起源のものとそうでないものがあるのですけれども、先ほど触れたデイヴィッド・ボームという人は、クリシュナムルティというインドの哲学者に影響を受けていて……。

八木　東洋起源なのですか？

本間　どこが起源とは言い難いのですが、とてもシンプルです。先程の「アサンプションをサスペンドする」というのは、むしろ瞑想に近い。ただし「瞑想」と言うとやはり誤解を孕むので彼らはなるべく言わないようにしているのですが、自分の中に思い浮かんだ考えを判断も何もせず、それ自体をまさにサスペンド、宙吊りにしてよく見るという作業を共同でしていく、ということを言っているのです。西洋、非西洋というのはともかく、重視されていることは、ひとつの概念や言葉が必ずしもひとつの意味、ひとつの方向だけに向かないというか、どこかに隙間のようなものがあって、そこには生活というものが染み込んでいる。一見同じ言葉を話しているように見えたり、言葉は交わされているのだけれども、言葉と意味の間に隙間があるというか、開きがあるというか、その隙間そのものを眺めながら、例えば「平等」という言葉なら「平等」という考え自体を更新していく。そこにとても哲学的意味を感じるのです。

八木　おっしゃっていることはよく分かります。

本間　同じことをパウロ・フレイレのような南米の教育者もやっています。彼は、教育は対話でなければならない、と繰り返し言うのですが、例えばスペイン語という共通語の読み書きを人々が学んでいくときに、それを学ぶことを通して自分たちの「知っていること」「知らないこと」をもう一回つくり直していくのです。単に原住民や貧困地域の人たちの識字率が上がるのではなくて、言葉自体を豊かにしていく、そのプロセスにとても関心があるのです。

八木　言葉自体を豊かにするとは、丁寧に辞書を編纂しているようなことなのかなと、今ふと思いました。新しい言葉の意味ができたら、そこに新しい用例が加えられるというか。

本間　そうですね、新しい用例ですね。

八木　用例というのは、多分時代とか環境とか、使われる状況によって増えていくもの。みんなが「そういう用例もあるね」と思ったら、その言葉の意味がひとつ豊かになるということですよね。そういう共同作業だと思ったら非常に納得できます。

本間　そうなのです。意味が根本的に書き換えられるわけではないけれども、新しい用例が加わる。そして適用例とか用例がつくられることによって、語彙全体も変わる。

八木　語彙というのは変わっていくことに意味があって、その変わり方、つまり使われ方の変化をとても丁寧に押さえていくという作業なのだろうなと思います。ああ、話が飛ぶようですが、こういう発想を自分がするようになった背景には、日本語学が専門の 2 代目センター長の金水敏さんと出会えたことがあるように思います。金水さんとの議論の中で、「言葉」の変化というものに敏感になったというか。

対話をどう残していくのか

八木　私は、この数年、高レベル放射性廃棄物、簡単に言うと原子力発電所の使用済み燃料なんですが、その後始末というか、この万年オーダーにわたる課題にどう向き合うかというテーマに関わっています。その中で、前の話の流れに繋がるんですが、議論し、考えたことを言語化する、少なくとも言葉として残すということにとても興味があります。高レベル放射性廃棄物は、仮に現行の国の計画どおりに処分が進んだとしても、これからその処分（長期管理）の場所を決めて、数十年かけて調査・工事をして地中深くに埋め、数百年かけて管理をし、さらにその先も超長期にわたってその場所に置き続けなければならないものです。その候補地の選定が今、具体的な形で進もうとしています。遠い将来世代にも影響がある話ですから、現世代の人間だけでどうすればよいと判断できるものではない。でも一方で、単なる先送りにはできないから、政策の可逆性も担保した上で、前に進められようとしています。そんな途方もないプロジェクトについて、少なくとも現世代の人々が、それは政治家や専門家だけでなく市井の人もふくめて、何を考え、どう思って決めたかということは、伝わるかどうかはわからないけれど、少なくとも残さなくてはいけないと考えています。どう決めたかよりも、決めるプロセスにおいて何が語られて、語られたもののうち、何が排除されて何が主流の意見として取り入れられたかを残したい、残すべきだという気持ちがあります。専門家の議論や政策文章の中には「将来世代に対する負担」という言葉がでてきますが、「将来世代に対する負担」を私たちはどう考えたのかということをもっと言語化したいと思っています。今のままでは、政策文書みたいな形でしか残らないのですけれども、そこにはあまり意味を感じないのです。

本間　具体的にはどういう書き物になるのですか？

八木　決まった事実とは別に、そこでなされたいろいろな対話を全部記録して、膨大なオーラルヒストリーみたいなものを残したいという感じでしょうか。

本間　なるほど。それならイメージできますね。

八木　それも問わず語りではなくて、「一体将来世代に負担をかけないということは、どういうことなのだろうね」ということを、皆でどう考えたかを残したいみたいな、そういうイメージです。そういう言葉は対話という形をとらないと生まれてこないのではないでしょうか。

本間　私は基本的には現場で生の言葉を交わすのがすごく好きなのですけれども、その対話を書き記すということもやってもいいかな、と少しずつ思い始めています。今私たちがやっている対話もそうなんですが、方法や結果の記録だけではなくて、いろいろな回り道をしたり言い直したりする対話という形態のコミュニケーションがもっている豊かさというか、対話のもつ意味をもう少し、大学としても、大学人としても発信したいと思うようになりました。

八木　この 10 年間にやるべきだったのに、できなかったことはまさにそれですね。あるいは 10 年かけてやるべきだと気づいたと言うべきかもしれないけれども。私もとても同意します。

本間　手前味噌なのですけれども、私は誰かと対話した内容をいったん文字にしてリライトした「対話録」みたいなものを『オレンジブック』に投稿しています［本間ほか 2015］。自分の話したことなのですけれども、読んでいて面白くて、それは他の表現法には代え難いと思う。論文という形で論点を整理したり、人工的にいろいろな角度から検証していくという形での論証や検証ではなく、対話を通して言葉が練られていくというプロセス自体がやはり面白いのです。他人が読んでも面白いと言われるのでそんなに独りよがりでもないだろうと思うのですが、そういう文字化しても残るような、対話ならではの意味の探究を準アカデミックな形で追究したらどういうことができるのかを模索しています。

八木　それはとても興味がありますね。

本間　準アカデミックだから論文にはならないけど、研究ノートというか資料として残したらどうか。それはインタビューとも違うのです。

八木　そういう意味ではこの 10 年、少なくとも一期のあたりは対話そのものを起こすということを非常に念頭に置いてきて、次のステップの課題は起こした対話の残し方、あるいは伝え方を考えることなのでしょうか。

本間　私は記録というよりも、それを新たな表現に変えていくのが大事かと思います。いろいろな選択肢がありうるのですが、私はやはり表現として読むに堪えるもの、もっと言えば魅力的なものにしたいので、単なる記録ではなくちょっと書き換えるというか、大筋は変えないけれども演出がいる。

八木　結局、自分の頭の中で再構成されたものを表現することに近いから、当然ハイライトがかかったりとか、状況が補足されたりということが行われる傾向はあるのですよね。

本間　今はまだサンプルとしてやっているという気持ちもありますが、こういうことを皆がもっとやっていけばだいぶん状況は変わるかもしれないし、もっと訓練していけば話し方も変わるかもしれない。もう少し対話の質も変わったりするのではないかなという期待もあります。

八木　大学は教育組織でもあるので、そういう生産の仕方に、私たちはむしろチャレンジすべきなのかもしれません。私はむしろ、そういうことに興味をもつ学生が同じような発信をできるかということにも興味があります。これは実践者としてのノウハウももち、いい実践を産み出せると同時に、アカデミックな安定的な立場があるからこそできるパ

ターンだとも言えるので、それをどこまで広げていけるのかというのは別の意味での困難があるように思います。

本間　ジレンマですね。確かに地位を得られたからできるという側面も大きい。

八木　ジレンマですよね、そこは。自分が書くところまでもっていけるかもしれないけれども、それを教育の場を通じて再生産するというのはどういうことなのか。

本間　その点も重要な問題なのですが、加えてもう一点、この発信法は、自分の関わっている現場の人を巻き込んでものを考える場合に、搾取や非対称性が比較的少ない巻き込み方だと思うのです。インタビューをして、それを分析して発表するというやり方には私はすごく抵抗がある。対話しているときは対等だとして、それを表現にもっていくときも、フィフティ・フィフティではないとしても一緒にできる作業のほうがいい。対話体の文章を書きかえるのであれば、話し手が表現や内容をチェックするだけなので参加の敷居が低いと思う。これはとても大事だと思うのです。論文にしてしまうと相手はほとんど文句を言えなくなる。アカデミックなライティングにするときに、この格差がとても引っ掛かるのです。こちらでは透明と思っていても、相手にはブラックボックスと映ったり、結果として書かれたものを読む人が限られてしまう。そうではない開かれた読み物という意味でも、この発信法を重視しています。

八木　開かれた読み物というのは本当に大事だと思います。読み物が書きたいわけでもないけれども、アカデミックペーパーだけを書くことに興味を感じない理由は結局そこなんです。

本間　こういう形で言葉になると、関わってくれた現場の実践者にも返せるものがある。

八木　私はJR西日本の福知山線事故（2005年）について、さまざまな形で被害者の方々同士の対話や、被害者と加害企業の対話に関わってきているのですが、先日、事故現場のその後（中心的には列車が衝突したマンションをどのように保存するのか）をめぐる対話についての論考（*b）を書きました。それに対してあるJR西日本の社員の方が、自分たちは自分たちのやっていることの社会的な意味を振り返るような立場にはないし、またその余裕もないけれども、自分たちのやってきていることにどういう意味があるのかを、全くの第三者ではなく、実践にも関わっている人（八木）から改めて提示されると、頭の中が整理されて、自分たちが次に向かう方向が見えてくる気がするいうコメントをいただきました。自分たちで反省的に自分たちの行動を振り返ることはできないけれど、一緒にやっている研究者が振り返ってくれることは良い距離感でもあるのではないでしょうか。

本間　それはどんな読み物ですか？

八木　オンラインジャーナルの『シノドス』です。アカデミックとジャーナリズムのちょうど中間にあるような媒体ではないでしょうか。

本間　なるほど、観察ということですね。私はこう観察した、と示すのはとても大事だと思います。

八木　観察といっても、自分もそこでファシリテーターをしているアクターなので、結局は完全な観察者ではなくて……。

本間　客観的ではないという意味ですね。

八木　そうですね。いずれにせよ、実践のスキルがあり、現場の側からもその研究者がいてくれるメリットがあるというか、実質的な協働の形がとれていれば、そこから生産できる「知」の発信の仕方があるというか、おのずと書ける感じはするのだけれども、そういう方式を教育の中でどう伝えていけるのかが課題ですね。

本間　確かに、私たちにとって簡単に思えることが若手研究者にすぐできるかというと、そうでもない。まず、対話の場を起こして面白い対話ができるか。そして、それをお互い満足いく表現までもっていけるか。さらに、それが評価というか、認められるか。この 3 つの難しさがあると思います。だから実はハードルが高いかもしれない。まず対話の技術が前提になりますから、そこまでいくだけでもとても時間がかかると思う。

八木　対話の技術は、結局技術だけでもないというか、ある種の職人芸に近いものなので、型として伝授できるものではないですよね。その人のジェンダーやパーソナリティ、年齢など、バックグラウンドとなる専門や経験、いろいろな要素を含めて総合的に対話の技術が規定される部分がありますものね。

「今」と結びついた教育を

本間　今後の課題として、現場と学生たちの両方への長期的な関わりについては、どういうところに注力したらいいでしょうか？

八木　少なくとも『オレンジブック』なども含めて、表現の形がたくさんあるのは良いことではないでしょうか。自分が書けると思えるようになれるまでにも時間がかかりましたが、例えば西村ユミさん、西川勝さん、渥美公秀さんなどの著書や論文を読む中で、私自身も「そうか、こういう書き方もあるんだな」と学んできました。彼らはそれぞれに新しいアカデミックな場での表現のスタイルを開拓してきた人々ですよね。そういうふうに、研究対象や方法論だけでなく、表現の仕方のバリエーションを増やしていくことが大事ではないでしょうか。

本間　そうですね。やはりアカデミック･ライティングの多様性、バリエーションが増えると、厚みも増し裾野も広がる。でも、競争に晒されている若手研究者は余計なことをしている暇がないところが、結構厳しいところなのです。どうしても量産しやすいものに走りがちだと思います。

八木　そうですね。型が決まっているほうが、ゴールが見えやすいですし、今年データをとったら来年にはペーパーにできる可能性が高いというスケジュールも見えやすいですから、どうしてもそういう方向になりますよね。

本間　難しいですね。来年か再来年か、新設の CSCD で授業をしようかなと思っているのが、アカデミック・ライティングの講座です。理系も文系も併せて多学部の学生相手に、論文ということを意識しなくて良いから、例えば詩も書いてみて、論理的な文章も書いてみて、それを組み合わせて、とにかく多様な書き方をやってみるというような授業を、

少人数でやってみたいなと思っているのです。CSCD が現在の人員でできることは、ツールを提供することでしょうね。こういうツールを使ってみたらという、入門だけですけれども。

八木　そうですね。少なくともツールとバリエーションなのでしょうね。

本間　そのツールのラインアップが大事だと思うのですけれども、そんなに人員が多いわけではないからたくさんできるわけではなく、10 個あったら良いほうですよね。

八木　CSCD の人員はそんなに多いわけではないと言っても、周りを見たら、やはりここは十分に恵まれていると思いますよ。

本間　あ、そうですか。

八木　人員数というよりは、対話に関わる研究をする者として、少なくともこういう会話が自分の所属する組織の中で成立する、しかも私と本間さんの間だけで成立するのではなく、その会話や関係性にもバリエーションがあるということ自体が、恵まれているのではないでしょうか。3 年弱 CSCD に在籍された神里達博さんもよく「同じ所属の教員同士がフリーに自分のやっていることをディスカッションできる環境って、大学であってもそんなに多くはないよ」と話しておられました。学会や研究会を通じて、同じ専門の者同士が、大学を超えた場でディスカッションする機会はあるけれども、隣の研究室や同じ専攻の別の先生と、本当の意味でフリーにディスカッションする機会はそれほど多くないと。それを良しとする環境や、それを楽しむ環境があるという意味で、ここはあまり大学っぽくないと。

本間　では何っぽいですか。

八木　いやいや、大学とはそういう場なのだけれども、いわゆる「日本の大学」っぽくないということなのでしょう。10 年間研究会をやり続けたからというよりも、繰り返しになりますが、日常の何気ない言葉のやり取りの中でインスピレーションを得たことや、「目から鱗」の経験が多くて、それが成立していたことこそが、「コミュニケーションデザイン」が成立していたということだろうなと。

本間　大学としては、時間のかかることに教職員、学生を含めてどう取り組むかに注力したほうがいい。この CSCD で今踏ん張っている人たちは、結果としてそれをやっている人たちなんですね。

八木　これからさらに難しくなっていく中で、どう踏ん張るかという感じですよね。

本間　今求められていることは、本来は研究者と大学と地域の人々、といった繋がりの中で長期的に培われていくべきものを大学の中にインストールして、短期間で仕上げて解決できる人材をつくりなさい、解決できる研究をしなさい、というような無茶を言われている気がします。

八木　結局、大学が置かれている環境の話と一緒ですね。じっくりちゃんと対話をして、問題を整理し直す能力とか、それで直接的な解決ではないけれども、ある種の別の問題に置き換える力は大事だと言われている一方で、非常にスピード解決を求められているという。

本間　非常に未来重視で教育を語りすぎているような気がしています。教育は「今」という時代の中で動いているので、今できないことを、人材を育てて解決するというふうには進

まないと思うのです。10 年かかって人材を養成しても、そのプログラムが 10 年後に有効かどうかなんて誰も保証できない。

八木　10 年後は違うものが問題になっている可能性が高いですよね。

本間　だから教育は常に「今」と結びついているべきだと思うのです。大学はそういうことが可能なシステムをもっておかないと、ちょっとしんどい。昔の教養教育というのは、良く言えばそういうシステムになっていたのかなと思います。

八木　それは「今」と結びついていると同時に、普遍的なものとも結びついていたのですよね、きっと。

（2015 年 11 月 13 日 CSCD にて）

文献

ー八木絵香（2010）「科学技術と社会をつなぐ「対話」のデザイン」『Communication-Design』3：142-153。

ー本間直樹ほか（2015）「からだから遠く：からだトーク 2014」『Communication-Design』13：23-47。

リンク先

*a）公共圏における科学技術・教育研究拠点（STiPS）：http://stips.jp

*b）八木絵香（2015）「事故や災害の「負の遺産」をどのように保存すべきなのか――JR 福知山線事故から 10 年」：http://synodos.jp/society/13869